

高知空港新国際線ターミナルビルの提案

指導教員 重山 陽一郎

1160059 小柏 尚己

1. はじめに

訪日する外国人旅客数は年々増加の傾向にある。日本政府は、2020年までの外国人旅客数の目標を3000万人としているが、現在は外客数の大半が大都市圏の巨大空港に集中している。

一方で、高知には国際線の定期発着便が無く、外国人旅客数も少数であるのが現状である。巨大空港の負担軽減と、高知を国外に発信していくという点から、高知もこれからは外国人旅客を誘致していく必要がある。

多数の外国人旅客を受け入れることの出来る規模を備えた、新国際線ターミナルビルを提案する。

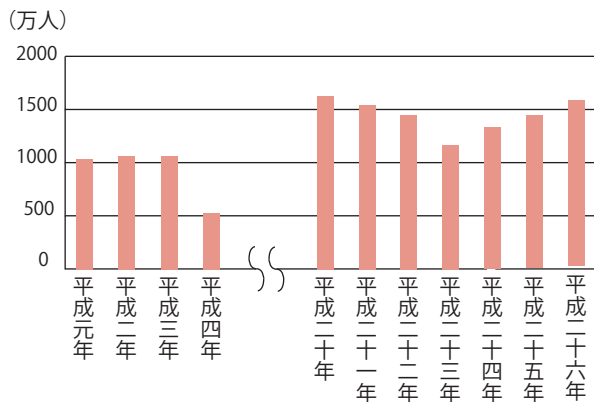


表 1. 全国の国際線旅客数（外国人）の推移
出典:国土交通省 航空輸送統計年報 (平成元年～二十六年)

2. 制約条件

空港周辺には、航空機の安全な航行を保障するため、障害物が進入してはならない一定の高さの面（制限表面）が設定されている。

この制限表面以上の高さに新国際線ターミナルビルが進入しないよう注意する。

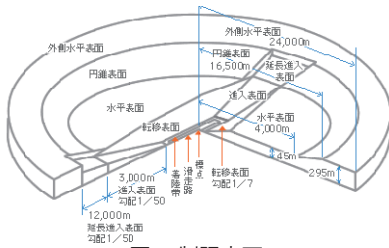


図 1. 制限表面

出典:国土交通省 大阪航空局

また、滑走路の増設を検討したが、周辺地域への影響の大きさを考慮し、増設は行わない。

国際線ターミナルビルは、既存の国内線ターミナルビルに、アトリウムを介し隣接させて設計する。国内線ターミナルビルと同程度の規模とし、前面道路とエプロンに干渉しないよう、ランドサイド側とエアサイド側への拡張は最小限に抑える。

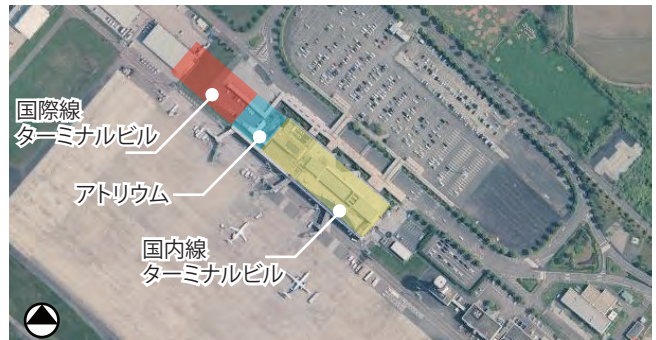


図 2. 新国際線ターミナルビルの位置

出典:国土地理院 基盤地図情報

3. 設計の概要

3.1 コンセプト

全国に存在する空港は画一的である場合が多く、その土地の特色を取り入れている空港は少ない。しかし、様々な人や文化やモノが集まる空港ならば、反対に高知の様々な人や文化やモノを集約して発信していくことが可能である。

高知らしさとは、ひろめ市場のように関連性の無いものが密集し共存すること（図3）、木材を十分に供給出来る豊かな自然が存在すること（図4）、おらからで外部に対してオープンな風土であると考えた。

これらの高知らしさを備えた、高知の空の玄関として相応しい国際線ターミナルビルを設計する。



図 3

高知らしさ



図 4

3-2. 主要機能配置

主要機能を優先的に配置していく際に、その中でもエアサイド側に配置されるべき機能の必要スペース（主に手荷物受取所、出国待合、チェックインカウンター、検疫と入国審査場などである）を優先的に確保した。各スペースの面積は、既存の国際線を有する空港を参考にした。

空港内のサインシステムには、JIS規格に準拠した標準案内用図記号を使用した。

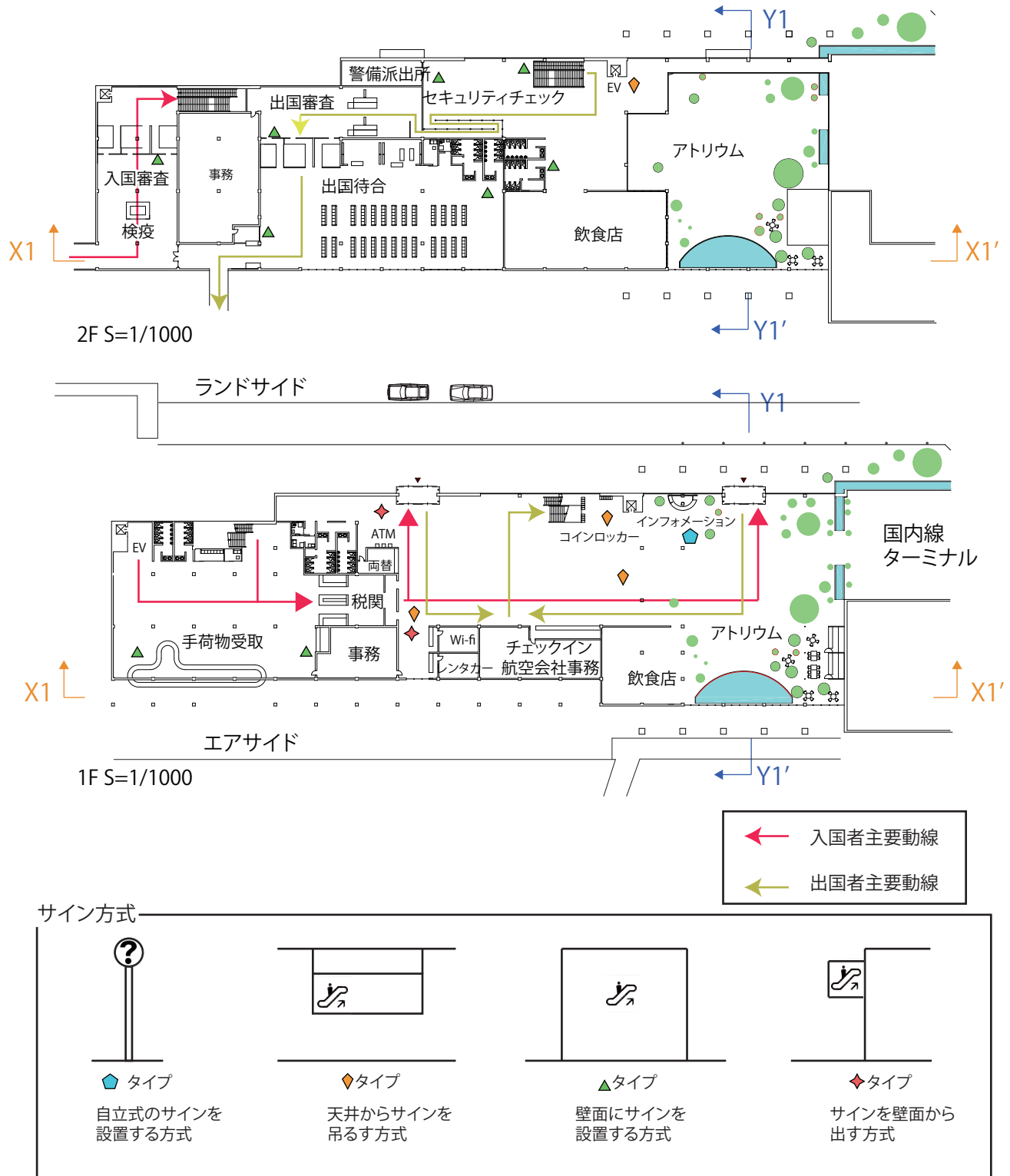


図 5. 全体平面図

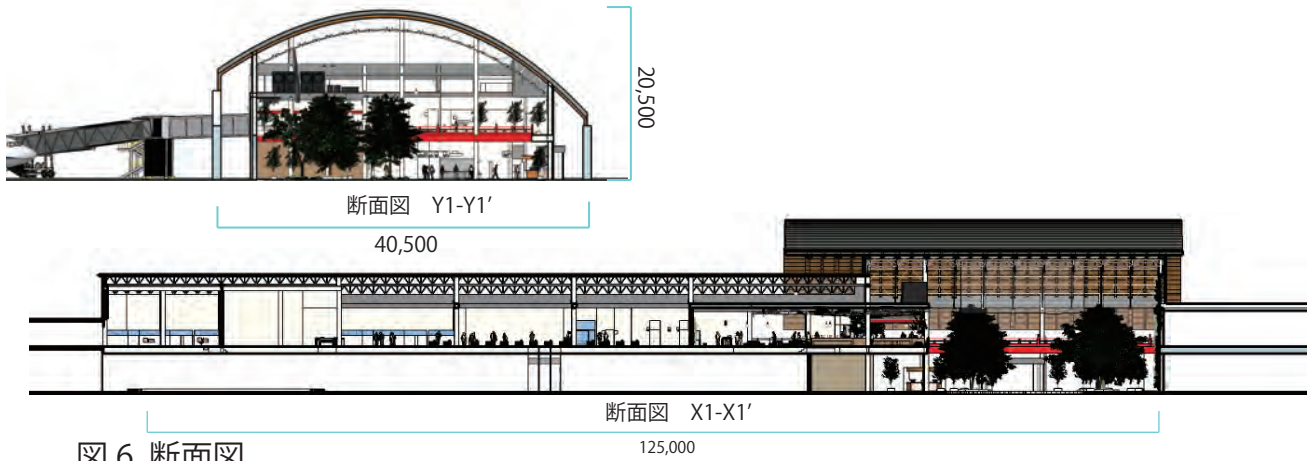


図 6. 断面図

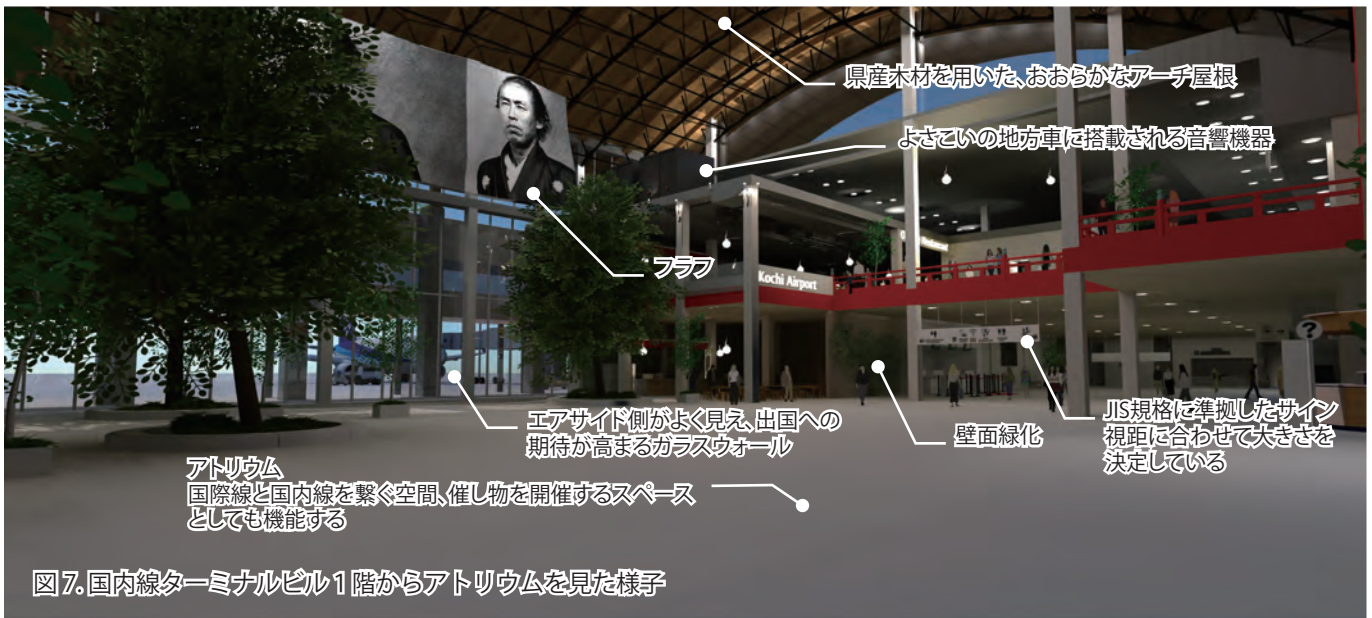


図7. 国内線ターミナルビル1階からアトリウムを見た様子

訪れた外国人旅客を迎えるアトリウムの屋根は、高知県産の木材を使用した暖かみのあるアーチ屋根とし、さらに1階からの高さを十分に確保することで空間に広がりを持たせた。また積極的に樹木を配置して水を引き入れ、空港の随所に壁面緑化を施し、高知の豊かな自然を取り入れた。



図 8.2階へ上がってすぐ、「Okyaku Restaurant」を見た様子

アトリウム横に、人々が集い交流する場所となる「Okyaku Restaurant」を設置し、アトリウム周辺が賑やかな空間となるようにした。「Okyaku Restaurant」では、酒や食べ物が振る舞われる。この「Okyaku Restaurant」は、アトリウムで催し物が行われる際には観覧席になり、セキュリティチェックを待つまでの待機所にもなる。2階の手すりには、高知の名所はりまや橋を彷彿させる赤い欄干とした。

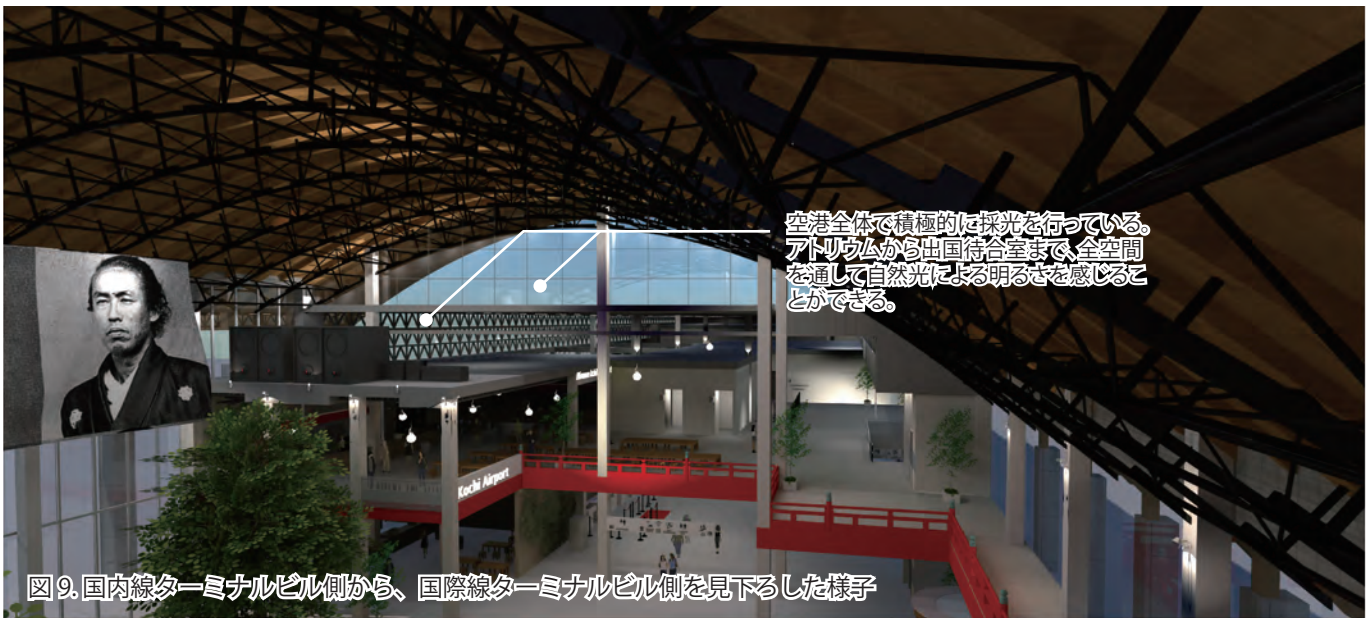


図9. 国内線ターミナルビル側から、国際線ターミナルビル側を見下ろした様子

新国際線ターミナルビルは、アトリウムから出国待合室まで2階部分の空間が全て一体となっており、セキュリティチェック、出国審査場以外のエリアにおいて自身の大まかな位置を把握することが出来る。空間が一体となっているので、アトリウムからの賑わいが空港全体に広がる。また採光を積極的に行っているため、国際線ターミナルビルのどの位置でも高知の太陽の明るさを感じることが出来る。



図10. 国際線ターミナルビルの税関を出てアトリウムまでを見通した様子



図11. 国際線出国待合室